

主体の解釈学

1982年1月27日(第一時限) pp. 147-174

1世紀から2世紀にかけての自己の実践の一般的な性格(p.147-p.149 後ろから3行目)

〈自己の実践における特徴〉

特徴1: 自己の実践が生の技法と統合されて絡み合うようになったこと

→導かれる帰結:

- ① 批判的機能=教えるというよりも矯正するというのが問題
- ② 医術との親縁性がはっきりした
- ③ 自己の実践と老年との間の、つまり自己の実践と人生そのものの間の特権的な関係
=自己の実践が老年を迎える準備を目的とするようになる

特徴2: 自己への配慮が無条件的な原理として定常化されること

=自己への配慮が誰にも適用可能な、誰にも実践可能な規則、身分的な前提条件もなく、技術的、職業的、社会的な目的とも結びついていない規則として現れる

- 呼びかけの普遍性と救済の稀少(自己の実践は誰にでも向けられた原理だったが、利用できるのはごく一部の
人だけ)
→この形式には2つあった。1つ目は、閉じた集団への所属。2つ目は教養あふれる閑暇を実践する能力。つまり、
宗教集団を中心とした閉鎖と教養による分離があった。
- この2つの形式を出発点として、一部の人が自己の実践によって全体としての柔然たるステータスに到達す
るために、様々な道具が定義され与えられていた
- 自己の実践は救済という空虚な形式が中心にある
- この救済はそれ自体として現れるのであって単に宗教的な嗜好ないしは経験の一現象、一側面ではない

その前に予備的な問題を提示したい↓

〈他者〉の問題、プラトン対話篇における師弟関係の3つの型(p.149後ろから2行目-p.151 l.13)

- 救済の形式と、それに与えることが必要となるような内容との間の媒介者としての他者の問題
- 自己実践が自己に到達し、それによって充実されるためには他人、他者が必要不可欠
→ソクラテス=プラトン対話篇で現れる状況を取り上げ、その中で3種の師弟関係について読み取れるとする

〈プラトン対話篇における師弟関係の3つの型〉

第1の型:模範の師弟関係=他者は行動のモデル、年少者に伝達ないし提示される、教育に不可欠な行動のモデル

第2の型:能力の師弟関係=年少者に知識や原則、能力、腕前などを伝える師弟関係

第3の型:ソクラテス的な師弟関係、困惑と発見の師弟関係=対話を通して実践されるもの

→いずれも、無知と記憶のある種の相互関係の上に成り立っている

- 問題はいかにして若者を無知から抜け出させるか
- そのためには若者は然るべく生きていくことを可能にしてくれるような、技や腕前、原則や知識を獲得する必要がある
- 問題なのは、模範を記憶し、物事を行う術を記憶、習得してそれと馴染むことであり、あるいは私たちに欠けている記憶そのものの中に見出されること
- 第3の型は、ソクラテスの役割が知は無知そのものから出てくること、出てくることを示す点に興味深い点しかし、ソクラテスの存在とソクラテスの問いかけの必要性は、他者なしにはなされ得ないことを示している

主体化の師導 (p.151 l.14-p.152)

- ヘレニズム及びローマ時代や帝政初期の自己の実践においても他者への関係は古典期(上記のもの)と同じく必要だったが、かたちは違うものであった
- 主体は無知であるというよりも不適切な教育を受けている、あるいはねじ曲げられ、悪徳に染まり、悪い習慣にとらえられているという要素の上に基礎付けられている
- 個人が向かうべきは生存の如何なる時点でも彼が経験したことがなかったような主体という身分で、自らを主体として構成しなくてはならない
↑ここに他者が介入してくる
- ここでの師はもはや記憶の師ではなくなり、個人を主体として改革し形成する^{オペラトゥール}操作媒体となる
=個人がその主体としての構成との間に取り結ぶ媒介者となる
- ムソニウスの断片を見てみると「知識や技芸 (tekhnai) の領域に属することを学ぼうとするときには、つねに訓練が、つねに師が必要である」と言っている
=無知から知へ移行するということは師無くしてあり得ない
↑この点の上にもこそ古典期の思考における師弟関係は基礎づけられ、この時期以降、主体は自分の変形の操作媒体たりえなくなりなる。ここにこそ師の必要性は書き込まれることになる

例としてセネカの一節を取り上げる↓

セネカにおけるストウルティティア stultitia[迷妄]の分析 (p.153-p.157 後ろから6行目)

- セネカは思考の動揺やごく自然に経験する不決断の状態に言及して
「こうした思考の動揺、不決断は、結局いわゆるストウルティティア [stultitia] なのだ。ストウルティティアとは如何なるものにも固定されず、いかなるものにも喜ぶことがないものである。さて、この状態から独力で脱け出ることができるほどに健康な (satis valet) 者は誰もいない。誰かが手を差しのべて外に引き出してやる必要がある。」(p.153 l.2-l.6)
- この短い一節から2つの点を指摘したい

第1: この師ないし助けの必要性において問題なのは健康の良し悪しであって、従って実際に矯正、訂正、修正であること
←セネカに数回にわたって描写されている

- 自己の世話をしていないうちはストウルティティアの状態で、自己実践のもう一つの極
→ではストウルティティアとは?
- ストルトゥスは自己へ配慮しない者のこと
- ストルトゥスの特徴①: 自らの精神の中に、外界が提供するあらゆる表象を受け入れる者のことで、これらの表象をひたすら受け入れそれを吟味することなく何を表しているか分析する術も知らない
→その結果、外部から来る表象に翻弄され、表象が精神のうちに入ってしまうと表象の内容と混じり合う主観的と言ってもいいような要素とを区別 discrimination できなくなる
- ストルトゥスの特徴②: 時間の中に散乱している者でもある
=生を流れるにまかせ、意見を絶えず変える、つまり生存は記憶も意思もなく流れていく
- ここで、セネカは年齢ごとに異なった生活様式を選ぶよりも悪い例として、老年について一度も考えたことがないままその到来を迎える人に言及する
→時間の中で散り散りになっていることの帰結は、ストウルトゥスであるような個人は然るべく欲することができない

〈然るべく欲するとは?〉→書簡第52の最初の章でストウルトゥスの意志とは何かと同時に、ストウルトゥスでない意志がいかにあるべきかを述べることで検討している

→ストウルティティアと反対の状態: 自由に欲すること、絶対的に欲すること、つねに欲すること。

ストウルティティアの状態:限定された、相対的な断片的で絶えず変化する意志

自由に、絶対的に、つねに欲することができる対象とは? ↓

- ひとが自由に外的な規定を考慮する必要なしに欲することができる唯一の対象で、絶対的に欲することができる対象、時と場合によって変える必要なしに欲することができる対象、それはいうまでもなく自己

↓まとめると

- セネカの説明から引き出すことができるストウルトゥスの定義とは、自己自身を欲しないもの、その意志が自己という唯一自由に、絶対的に、つねに欲することのできる対象に向けられていない者のこと
↳ストウルティティアから抜け出すとは、まさにひとが自己を欲することができるようにすること、自己自身を欲することができるようにすること、自由に、絶対的に、つねに欲することのできる唯一の対象である自己へ向かうようにすること
しかし、個人によって脱することはできない=誰か他の人を介してのみなされ得る

第1の要素:ストウルティティアに特徴的な意志は構造的に自己へ配慮することができないため、自己の配慮は他者の現前、挿入、介入を必要とする

第2の要素:伝統的な意味での教育者や記憶の師でない、誰か別の人が必要

- それが何かはテキストでは全く述べていないが、educat という命令形を用いており、educere (手を差し伸べそこから抜け出させ、外へと導く)という意味で使っている
- それはつまり、個人にひとは手を差し伸べて彼の置かれている状態、身分、生の様式、存在様式から抜け出させることになる

そうすると提起される問題は次のようになる ↓

主体化の師としての哲学者 (p.157 後ろから5行目-p.159 l.9)

- 主体自身による主体の構成に必要な他者の働きかけとはどのようなものだろうか?この他者の働きかけはどのように自己の配慮の中に、不可欠な要素として書き込まれることになるのか?
- 主体の主体自身の関係、その定立において直接に現れる媒介者、必要不可欠な操作媒体は哲学者
- 哲学者は自己自身を統治したいと思う人々を統治するものであって、他者を統治したいと思う人々を統治する者
↑ここに哲学と弁論術の間の本質的な分岐がある
- 弁論術:言葉を用いて他者に働きかける方法を逐一挙げて分析するもので、哲学は自分自身の、あるいは他者の世話を然るべく行うために自らを利用することができ、あるいは他者の利用に供することができる原理と実践の総体
- 具体的、実践的には、哲学者、哲学はどのようにして自らの存在の必要性和自己の実践の個人における構成、展開、組織を説明しているのか?
→これには2つの大きな制度的形態があり、それはヘレニズム型の形態とローマ型の形態である

ヘレニズム期の制度的形式、エピクロス派の学校とストア派の会合 (p.159 l.10-p.165 後ろから4行目)

- ヘレニズム的形態とは学校のことで、学校は個人の共同体生活を含意する閉鎖的な性格を持つことがある
例)ピュタゴラス派の学校、エピクロス派の学校
- 霊的な導きが非常に大きな役割を持っていた

〈エピクロス派の学校〉

- エピクロス派の学校は複雑で厳格な階級に従って組織されており、人々の間には序列があった
- その筆頭に来るのは賢者で唯一指導者を必要としないもので、エピクロスその人。それ以外は皆指導者を必要とした
- 学校の中で決まった地位と役割を担い、それぞれの地位と価値に応じて指導の実践における特定の役割を演じていた
↓この学校における良心の指導の実践についてはいくつかの点を指摘できる
- 第1に、めいめいが必ず自分の個人的な指導を行ってくれるヘーゲモンつまり案内人を、指導者を持っていないければならなかったこと
- 第2にこの個人的な指導は二つの原理に従わなくては行けない

1 つ目は、個人的指導は両者の間、指導するものとされる者の間に強い感情的な関係、友愛の関係なしに行われてはならなかった

2 つ目は、この指導はある種の「ものの言い方」、ある種の「言葉の倫理」のようなものを含有していた＝パレーシアと呼ばれている

↑パレーシアとは心を開いていること、二人のパートナーが互いに考えていることを包み隠さず、率直に話し合うことの必要をいうもの（これは次の時間に分析）

- － 人には2種類ある：1つはひとから提供される手引きに対する内的な困難がほとんどないため、導きさえすれば良い人たち。もう一つは、元々の性質が悪いことから彼らの置かれた状態から力づくで引っ張り出し、押し出さなくてはならないような人たち。
- － セネカは上記のことに付け加えて弟子と指導されるものというカテゴリーの間には、価値の点での違いや質の上での違いがあるわけではなかったとしている。それは本質的には技術の違いである。
＝両方を同じように指導することはできないが、いったん指導の作業が終わってしまえば、彼らが我がものとした徳はいずれにしても同じ型、同じ水準のものであったということ

〈ストア派の学校〉p.161 後ろから10行目－

- － 良心の指導の閉鎖的で共同生活を営む集団の存在との結びつきはもっと弱かった
→アリアノスによるエピクテトスのテキストからニコポリスにおけるエピクテトスの学校の様子が想像できる
- － まず、会合の場所であった。ある種の寄宿制度を前提としており、生徒は日中ずっとひとつの場所に留まるものとされていた←この場所にはいくつかのカテゴリーの生徒がいた

①研修に来ている生徒たち

→他者の精神の中で進行する戦いをうまく操作する術を心得ていて、言説の十分な技法によって彼が信じる真実を論駁してその精神を正しい方向に向けることができるのが真の哲学者で、これに反して導くことができないとしても咎めるのは自分自身である。ここに自分も教える側に良心を導く側に回る人たちに向けた教育に関する、非常に見事な指針の一例がある。

②哲学者になるために来ている生徒たち

→アリアノスの『語録』のなかで言及されている様々な場面で興味深い役割を演じている

- 第1巻の第11章：人生でしっかりと居場所を定め、公職も与えられ、家族がある人に対してすら、エピクテトスは学校でしばらく研修して哲学の教育を受けてはどうかと言う
- 第2巻の第4章では、弁論術側の人々がどう捉えられていたかが集約されている。また、エピクテトスが実利的な相談の要求を問題をずらすことで変形させる場合についても述べている。
- 第3巻の第9章で、エピクテトス派が社会的義務は拒絶しつつも実際には行うと思われるものだったという矛盾において、エピクテトスはエピクロス派全般に対する批判を展開する

→つまり、エピクテトスを中心としてはっきりと現れて来ている学校的形式の中には、実際には指導や指導の技術そのものの定式化がとる様々な形式、指導の第変様々な容態が一大系列を成しているのが見られる

ローマの制度的形式(p.165 後ろから3行目-p.168)

- － 上記のエピクテトスと相対する形式をローマ的形式と呼ぶ
- － これは私的な忠告者の携帯のことで、学校の構造から派生したものでは全くない
- － ローマに特徴的な顧客の関係、すなわち準契約的な一種の依存が2人の個人の間に助力の非対称的な交換を含有し、2人が常に不平等な社会的身分を持っているような顧客の関係に同化されるようなものであるから
- － この意味において、私的な忠告者は学校と正反対のやり方であると言える
→私的な忠告者というやり方だと、貴族の大きな一族、家長、責任ある政治的有力者が自分の家に、忠告者として使える哲学者を受け入れ、身近に住まわせるということになる（←このような事例は共和政および帝政ローマで数多く見られる）

例) デメトリオス: 忠告者は生存の忠告者ともいうべき役回り、特定の状況についてアドバイスをする人。また、一つのサークルにとって一種の文化エージェントでもある。サークルの中に論理的な知識と生存の実践的な図式とを、また政治的な選択を導入した。特に帝政初期には、王位の世襲の問題などもあったが、全て議論の主要な対象となり哲学者が忠告者という立場から選択を行うことになる

- 哲学者のこうしたあり方の重要性がはっきりするにつれて、哲学者はその特異な、還元不可能な、日常生活や毎日の生活、政治生活の外部に位置する機能を失っていくのが見られる
→ そうなるにつれて、哲学者という職業は非・職業化していった
- つまり、自己の実践において〈他者〉の助けを借りる必要が出てくればくるほど、したがって哲学の必要がはっきりしてくればくるほど、それだけ哲学者の持つ、厳密な意味での哲学的な機能はばやけてしまい、哲学者は一層生存の忠告者として現れるようになる
- 日常的な存在様式に同化してしまうことで、哲学者の専門的な領域外での任意の個人間の社会的関係の形式としての良心の指導の実践へと私たちを導く

【疑問】わからないところが多くてお恥ずかしいですが…

- 初歩的な質問で申し訳ないのですが、主体化の指導という部分で p.152 1.1 あたりにある「個人が向かうべきはその生存の如何なる時点でも彼が経験したことがなかったような主体という身分」というのがいまピンとこなかったので、解説していただきたいです。古典期とヘレニズム・ローマ期ではどちらも他者の介入が必要で、後者の方では必要となる形が違うということまでは理解できたのですが、細かい部分がよく理解できませんでした。
- 個人的な指導はなぜ指導するものとされる者の間には強い感情的な関係や、心を開いていることが必要なのでしょうか？
- 次の時間とあったので、次回のところで詳しく話されると思いますが、心を開いているというのは何を持ってそう言うのが疑問に思いました。率直に話してるかどうかは本人にしかわからないのではないかと、相手が本当に思っていることを言っているかはわからないことなのではないかなと思ってしまいました。←もしかしたら、フォーコーが意味していることとズレているかもしれません。その際は飛ばしてください。
- P. 165 1.3「彼は不義をはたらいているのですが、そもそも女性は共有であるべきなのであって…」のところの「女性は共有であるべき」の意味がわかりませんでした。